紅玉

泉鏡花

時。　現代、初冬。

場所。　府下郊外の原野。

人物。

画工。侍女。（烏の仮装したる）

貴夫人。老紳士。少紳士。小児五人。

——別に、三羽の烏。（侍女と同じ扮装）

小児一　やあ、停車場（ステエション）の方の、遠くの方から、あんなものが遣（や）って来たぜ。

小児二　何だい何だい。

小児三　ああ、大（おおき）なものを背負（しょ）って、蹌踉々々（よろよろ）来るねえ。

小児四　影法師まで、ぶらぶらしているよ。

小児五　重いんだろうか。

小児一　何だ、引越かなあ。

小児二　構うもんか、何だって。

小児三　御覧よ、脊（せな）よりか高い、障子見たようなもの

を背負ってるから、凧(たこ)が歩行(ある)いて来るようだ。

小児四　糸をつけて揚げる真似(まね)エしてやろう。

小児五　遣れ遣れ、おもしろい。

　凧を持ったのは凧を上げ、独楽(こま)を持ちたるは独楽を廻す。手にものなき一人(いちにん)、一方に向い、凧の糸を手繰る真似して笑う。

画工　(枠張(わくばり)のまま、絹地の画(え)を、やけに紐(ひも)からげにして、薄汚れたる背広の背に負い、初冬(はつふゆ)、枯野の夕日影にて、あかあかと且つ寂(さみ)しき顔。酔える足どりにて登場)……落第々々、大落第。(ぶらつく体を杖(ステッキ)に突掛(つっか)くる状(さま)、疲切ったる樵夫(きこり)のごとし。しば

らくして、叫ぶ）畜生、状(ざま)を見やがれ。声に驚き、且つ活(い)ける玩具(おもちゃ)の、手許(てもと)に近づきたるを見て、糸を手繰りたる小児(こども)、衝(つ)と開いて素知らぬ顔す。

画工、その事には心付かず、立停(たちど)まりて嬉戯(きぎ)する小児等(こどもら)を眗(みまわ)す。

よく遊んでるな、ああ、羨(うらやま)しい。どうだ。皆(みんな)、面白いか。

小児等、彼の様子を見て忍笑(しのびわらい)す。中に、糸を手繰りたる一人(いちにん)。

小児三　ああ、面白かったの。

画工　（管をまく口吻）何、面白かった。面白かったは不可んな。今の若さに。……小児をつかまえて、今の若さも変だ。（笑う）はははは、面白かったは心細い。過去った事のようで情ない。面白いと云え、面白がれ、面白がれ。なおその上に面白くなれ。むむ、どうだ。

小児三　だって、兄さん怒るだろう。

画工　（解し得ず）俺が怒る、何を……何を俺が怒るんだ。生命がけで、描いて文部省の展覧会で、平つくばって、可いか、洋服の膝を膨らまして膝行ってな、いい図じゃないぜ、審査所のお玄関で頓首再拝

と仕(つかまつ)った奴(やつ)を、紙鉄砲で、ポンと撥(は)ねられて、ぎゃふんとまいった。それでさえ怒り得ないで、悄々(すごすご)と杖(つえ)に縋(すが)って背負(しょ)って帰る男じゃないか。景気よく馬肉(けとばし)で呷(あお)った酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい処へ、げっそり空腹(すきばら)と来て、蕎麦(そば)ともいかない。停車場(ステエション)前で饂飩(うどん)で飲んだ、臓府(ぞうふ)がさながら蚯蚓(みみず)のような、しッこしのない江戸児擬(えどッこまがい)が、どうして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、だらしやない。

　他の小児(こども)はきょろきょろ見ている。

小児三　何だか知らないけれどね、今、向うから来る

兄さんに、糸目をつけて手繰っていたんだぜ。

画工　何だ、糸を着けて……手繰ったか。いや、怒りやしない。何の真似だい。

小児一　兄さんがね、そうやってね、ぶらぶら来た処がね。

小児二　遠くから、まるでもって、凧の形に見えたんだもの。

画工　ははあ、凧か。（背負ってる絵を見る）むむ、そこで、（仕形（しかた）しつつ）とやって面白がっていたんだな。処で、俺がこう近くに来たから、怒られやしないかと思って、その悪戯（いたずら）を止（や）めたんだ。だから、面白かっ

たと云うのか。……かったは寂しい、つまらない。壮に面白がれ、もっと面白がれ。さあ、糸を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧になって、上ってやろう。上って、高い空から、上野の展覧会を見てやる。京、大阪を見よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの児来て煽れ、それ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。（笑う）ははは、面白い。

　小児等しばらく逡巡す。画工の機嫌よげなるを見るより、一人は、画工の背を抱いて、凧を煽る真似す。一人は駈出して距離を取る。その一人。

小児三　やあ、大凧だい、一人じゃ重い。

小児四　うん、手伝ってやら。（と独楽を懐にして、立並ぶ）――風吹け、や、吹け。山の風吹いて来い。――（同音に囃（はや）す。）

画工　（あおりたる児の手を離るると同時に、大手を開いて）こうなりゃ凧絵だ、提灯屋（ちょうちんや）だ。そりゃ、しゃくるぞ、水汲（く）むぞ、べっかっこだ。

小児等（こどもら）の糸を引いて駈（かけ）るがままに、ふらふらと舞台を飛廻り、やがて、樹根（きのね）に撞（どう）となりて、切なき呼吸（いき）つく。

暮色到る。

小児三　凧は切れちゃった。

小児一　暗くなった。——ちょうど可(い)い。

小児二　また、……あの事をしよう。

その他　遣ろうよ、遣ろうよ。——（一同、手はつながず、少しずつ間をおき、ぐるりと輪になりて唄う。）

　　青山、葉山、羽黒の権現(ごんげん)さん
　　あとさき言わずに、中はくぼんだ、おかまの
　　　神さん

　唄いつつ、廻りつつ、繰り返す。

画工　（茫然(ぼうぜん)として黙想したるが、吐息して立ってこれを視(なが)む。）おい、おい、それは何の唄だ。

小児一　ああ、何の唄だか知らないけれどね、こうやっ

て唄っていると、誰か一人踊出すんだよ。

画工　踊る？　誰が踊る。

小児二　誰が踊るって、このね、環の中へ入って踞んでるものが踊るんだって。

画工　誰も、入ってはおらんじゃないか。

小児三　でもね、気味が悪いんだもの。

画工　気味が悪いと？

小児四　ああ、あの、それがね、踊ろうと思って踊るんじゃないんだよ。ひとりでにね、踊るの。踊るまいと思っても。だもの、気味が悪いんだ。

画工　遣ってみよう、俺を入れろ。

一同　やあ、兄さん、入るかい。

画工　俺が入る、待て、（画を取って大樹の幹によせかく）さあ、可（い）いか。

小児三　目を塞（ふさ）いでいるんだぜ。

画工　可（よし）、この世間（よのなか）を、酔って踊りゃ本望だ。

　　青山、葉山、羽黒の権現さん

小児等（こどもら）唄いながら画工の身の周囲（まわり）を廻（めぐ）る。環の脈を打って伸び且つ縮むに連れて、画工、ほとんど、無意識なるがごとく、片手また片足を異様に動かす。唄う声、いよいよ冴（さ）えて、次第に暗くなる。時に、樹の蔭より、顔黒く、嘴（くちばし）黒く、烏（からす）の頭（かしら）

して真黒（まっくろ）なるマント様（よう）の衣（きぬ）を裾（すそ）まで被（かぶ）りたる異体のもの一個顕（あらわ）れ出で、小児（こども）と小児の間に交（まじ）りて斉（ひと）しく廻る。

地に踞（うずくま）りたる画工、この時、中腰に身を起して、半身を左右に振って踊る真似す。

続いて、初（はじめ）の黒きものと同じ姿したる三個、人の形の烏。樹蔭より顕れ、同じく小児等の間に交って、画工の周囲を繞（めぐ）る。

小児等は絶えず唄う。いずれもその怪（あやし）き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の烏出でて輪に加わる頃より、画工全く立上り、我を忘れたる状（さま）して

踊り出(いだ)す。初手の鳥もともに、就中(なかんずく)、後(あと)なる三羽の鳥は、足も地に着かざるまで跳梁(ちょうりょう)す。

彼等の踊狂う時、小児等は唄を留(と)む。

一同 （手に手に石を二ツ取り、カチカチと打鳴らして）魔が来た、でんでん。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂(さみ)しく囃(はや)す）ほんとに来た。そりゃ来た。

小児のうちに一人(いちにん)、誰とも知らずかく叫ぶとともに、ばらばらと、左右に分れて逃げ入る。

木(こ)の葉落つ。

木の葉落つる中に、一人(いちにん)の画工と四個の黒き姿と

頻(しきり)に踊る。画工は靴を穿(は)いたり、後の三羽の鳥皆爪尖(つまさき)まで黒し。初(はじめ)の鳥ひとり、裾をこぼるる褄紅(つまくれない)に、足白し。

画工　（疲果てたる状(さま)、撞(どう)と仰様(のけざま)に倒る）水だ、水をくれい。

いずれも踊り留(や)む。後の鳥三羽、身を開いて一方に翼を交わしたるごとく、腕を組合せつつ立ちて視(なが)む。

初の鳥　（うら若き女の声にて）寝たよ。まあ……だらしのない事。人間、こうはなりたくないものだわね。――そのうちに目が覚めたら行(ゆ)くだろう――別

にお座敷の邪魔にもなるまいから。……どれ、（樹の蔭に一むら生茂(おいしげ)りたる薄(すすき)の中より、組立てに交叉(こうさ)したる三脚の竹を取出(とりいだ)して据え、次に、その上の円(まろ)き板を置き、卓子(テエブル)のごとくす。）

後の烏、この時、三羽(みッつ)とも無言にて近づき、手伝う状(さま)にて、二脚のズック製、おなじ組立ての床几(しょうぎ)を卓子の差向いに置く。

初(はじめ)の烏、また、旅行用手提げの中より、葡萄酒(ぶどうしゅ)の瓶を取出だし卓子の上に置く。後の烏等、青き酒、赤き酒の瓶、続いてコップを取出だして並べ揃う。

やがて、初の烏、一挺(ちょう)の蠟燭(ろうそく)を取って、これに火

を点ず。

舞台明(あかる)くなる。

初の烏　（思い着きたる体(てい)にて、一ツの瓶の酒を玉盞(ぎょくさん)に酌(つ)ぎ、燭(しょく)に翳(かざ)す。）おお、綺麗(きれい)だ。燭(あかり)が映って、透徹(すきとお)って、いつかの、あの時、夕日の色に輝いて、ちょうど東の空に立った虹(にじ)の、その虹の目のようだと云って、薄雲に翳(かざ)して御覧なすった、奥様の白い手の細い指には重そうな、指環(ゆびわ)の球(たま)に似てること。

三羽の烏、打傾いて聞きつつあり。

ああ、玉が溶けたと思う酒を飲んだら、どんな味がするだろうねえ。（烏の頭(かしら)を頂きたる、咽喉(のど)の黒き

布をあけて、少（わか）き女の面（おもて）を顕（あらわ）し、酒を飲まんとして猶予（ためら）う。）あれ、ここは私には口だけれど、鳥にするとちょうど咽喉だ。可厭（いや）だよ。咽喉だと血が流れるようでねえ。こんな事をしているんだから、気になる。よそう。まあ、独言（ひとりごと）を云って、誰かと話をしているようだよ……

（四辺（あたり）を眴（みまわ）す）そうそう、思った同士、人前で内証で心を通わす時は、一ツに向った卓子（テエブル）が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽（かす）な、しかし脈を打って、血の通う、その符牒（ふちょう）で、黙っていて、暗号（あいず）が出来ると、いつも奥様がおっしゃるもんだから、——

卓子さん（卓をたたく）殊にお前さんは三ツ脚で、狐狗狸（こっくり）さん、そのままだもの。活（い）きてるも同じだと思うから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うっかりして、少々大事な事を饒舌（しゃべ）ったんだから、お前さん聞いたばかりにしておいておくれ。誰にも言っては不可（いけ）ないよ。ちょいと、注（つ）いだ酒をどうしよう。ああ、いい事がある。（酔倒れたる画工に近づく。後（あと）の鳥一ツ、同じく近寄りて、画工の項（うなじ）を抱（いだ）いて仰向（あおむ）けにす。）

酔ぱらいさん、さあ、冷水（おひや）。

画工　（飲みながら、現（うつつ）にて）ああ、日が出た、が、

俺は暗夜（やみ）だ。（そのまま寝返る。）

初の烏　日が出たって――赤い酒から、私のこの烏を透かして、まあ。――画（え）に描いた太陽（おひさま）の夢を見たんだろう。何だか謎のような事を言ってるわね。――さあさあ、お寝室（ねま）ごしらえをしておきましょう。（もとに立戻りて、また薄（すすき）の中より、このたびは一領の天幕（テント）を引出し、卓子（テエブル）を蔽（おお）うて建廻す。三羽の烏、左右よりこれを手伝う。天幕の裡（うち）は、見ぶつ席より見えざるあつらえ。）お楽（たのし）みだわね。（天幕を背後（うしろ）にして正面に立つ。三羽の烏、その両方に彳（たたず）む。）もう、すっかり日が暮れた。（時に、はじめてフト自

分の他(ほか)に、鳥の姿ありて立てるに心付く。されどおのが目を怪(あやし)む風情。少しずつ、あちこち歩(ある)行く。歩行くに連れて、鳥の形動き絡(まと)うを見て、次第に疑惑(うたがい)を増し、手を挙ぐれば、鳥等も同じく挙げ、袖を振動かせば、斉(ひと)しく振動かし、足を爪立つれば爪立ち、踞(しゃが)めば踞むを透(すか)し視(なが)めて、今はしも激しく恐怖し、慌(あわただ)しく駈出(かけいだ)す。）

帽子を目深(まぶか)に、オーバーコートの鼠色なるを被(き)、太き洋杖(ステッキ)を持てる老紳士、憂鬱(ゆううつ)なる重き態度にて登場。

初(はじめ)の鳥ハタと行当る。驚いて身を開く。紳士そ

の袖を捉(とら)う。初の烏、遁(のが)れんとして威(おど)す真似して、かあかあ、と烏の声をなす。泣くがごとき女の声なり。

紳士　こりゃ、地獄の門を背負(しょ)って、空を飛ぶ真似をするか。（掴(つか)みひしぐがごとくにして突離す。初の烏、撞(どう)と地に座(ざ)す。三羽の烏はわざとらしく吃驚(きっきょう)の身振(みぶり)をなす。）地を這(は)う烏は、鳴く声が違うじゃろう。うむ、どうじゃ。地を這う烏は何と鳴くか。

初の烏　御免なさいまし、どうぞ、御免なさいまし。

紳士　ははあ、御免なさいましと鳴くか。（繰返して）御免なさいましと鳴くじゃな。

初の烏　はい。

紳士　うむ、（重く頷《うなず》く）聞えた。とにかく、汝《きさま》の声は聞えた。――こりゃ、俺の声が分るか。

初の烏　ええ。

紳士　俺の声が分るかと云うんじゃ。こりゃ。面《つら》を上げろ。――どうだ。

初の烏　御前様《ごぜんさま》、あれ……

紳士　（杖《ステッキ》をもって、その裾《すそ》を圧《おさ》う）ばさばさ騒ぐな。槍《やり》で脇腹を突かれる外に、樹の上へ得《え》上る身体《からだ》でもないに、羽ばたきをするな、女郎《めろう》、手を支《つ》いて、静《じっ》として口をきけ。

初の烏　真（まこと）に申訳のございません、飛んだ失礼をいたしました。……先達（せんだ）って、奥様がお好みのお催しで、お邸（やしき）に園遊会の仮装がございました時、私（わたくし）がいたしました、あの、このこしらえが、余りよく似合ったと、皆様がそうおっしゃいましたものでございますから、つい、心得違いな事をはじめました。あの……後で、御前様が御旅行を遊ばしましたお留守中は、お邸にも御用が少うございますものですから、自分の買もの、用達（ようた）しだの、何のと申して、奥様にお暇を頂いては、こんな処へ出て参りまして、偶（たま）に通りますものを驚かしますのが面白くてなりま

せんので、つい、あの、癖になりまして、今晩も……旦那様に申訳のございません失礼をいたしました。どうぞ、御免遊ばして下さいまし。

紳士　言う事はそれだけか。

初の烏　はい？（聞返す。）

紳士　俺に云う事は、それだけか、女郎。

初の烏　あの、（口籠る）今夜はどういたしました事でございますか、私の形……あの、影法師が、この、野中の宵闇に判然と見えますのでございます。それさえ気味が悪うございますのに、気をつけて見ますと、二つも三つも、私と一所に動きますのでござ

いますもの。

三方に分れて彳(たたず)む、三羽の鳥、また打頷(うちうなず)く。

もう可恐(おそろし)くなりまして、夢中で駈出しましたものですから、御前様に、つい——あの、そして……御前様は、いつ御旅行さきから。

紳士　俺の旅行か。ふふん。（自ら嘲(あざ)ける口吻(くちぶり)）汝(きさま)たちは、俺が旅行をしたと思うか。

初の鳥　はい、一昨日から、北海道の方へ。

紳士　俺の北海道は、すぐに俺の邸の周囲じゃや。

初の鳥　はあ、（驚く。）

紳士　俺の旅行は、冥土(めいど)の旅のごときものじゃ。昔か

ら、事が、こういう事が起って、それが破滅に近づく時は、誰もするわ。平凡な手段じゃ。通例過ぎる遣方（やりかた）じゃが、せんという事には行（ゆ）かなかった。今云うた冥土の旅を、可厭（いや）じゃと思うても、誰もしないわけには行（ゆ）かぬようなものじゃ。また、汝等（きさまら）とても、こういう事件の最後の際には、その家の主人か、良人（おっと）か、可（え）えか、俺がじゃ、ある手段として旅行するに極（きま）っとる事を知っておる。汝（きさま）は知らいでも、怜悧（りこう）なあれは知っておる。汝とても、少しは分っておろう。分っていて、その主人が旅行という隙間（すきま）を狙う。わざと安心して大胆な不埒（ふらち）を働く。うむ、耳

を蔽(おお)うて鐸(すず)を盗むというのじゃ。いずれ音の立ち、声の響くのは覚悟じゃろう。何もかも隠さずに言ってしまえ。いつの事か。一体、いつ頃の事か。これ。

侍女　いつ頃とおっしゃって、あの、影法師の事でございましょうか。それは唯今(ただいま)……

紳士　黙れ。影法師か何か知らんが、汝等(きさまら)三人の黒い心が、形にあらわれて、俺の邸の内外を横行しはじめた時だ。

侍女　御免遊ばして、御前様、私(わたくし)は何にも存じません。

紳士　用意は出来とる。女郎(めろう)、俺の衣兜(かくし)には短銃(ピストル)があ

るぞ。

侍女　ええ。

紳士　さあ、言え。

侍女　御前様、お許し下さいまし。春の、暮方（くれがた）の事でございます。美しい虹（にじ）が立ちまして、盛りの藤の花と、つつじと一所に、お庭の池に影の映りましたのが、薄紫の頭（かしら）で、胸に炎の搦（から）みました、真紅（しんく）なつつじの羽の交（まじ）った、その虹の尾を曳（ひ）きました大きな鳥が、お二階を覗（のぞ）いておりますように見えたのでございます。その日は、御前様のお留守、奥様が欄干越に、その景色をお視（なが）めなさいまして、――ああ、綺

麗な、この白い雲と、蒼空の中に漲った大鳥を御覧——お傍に居りました私にそうおっしゃいまして——この鳥は、頭は私の簪に、尾を私の帯になるために来たんだよ。角の九つある、竜が、頭を兜に、尾を草摺に敷いて、敵に向う大将軍を飾ったように。……けれども、虹には目がないから、私の姿が見つからないので、頭を水に浸して、うなだれ悄れている。どれ、目を遣ろう——と仰有いますと、右の中指に嵌めておいで遊ばした、指環の紅い玉でございます。開いては虹に見えぬし、伏せては奥様の目に見えません。ですから、その指環をお抜きな

さいまして。

紳士　うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女　そして、雪のようなお手の指を環（わ）に遊ばして、高い処で、青葉の上で、虹の膚（はだ）へ嵌めるようになさいますと、その指に空の色が透通りまして、紅い玉は、颯（さっ）と夕日に映って、まったく虹の瞳になって、そして晃々（きらきら）と輝きました。その時でございます。お庭も池も、真暗（まっくら）になったと思います。虹も消えました。黒いものが、ぱっと来て、目潰（めつぶ）しを打ちますように、翼を拡げたと思いますと、その指環を、奥様の手から攫（さら）いまして、鳥が飛びましたのでございま

す。露に光る木（こ）の実だ、と紅い玉を、間違えたのでございましょう。築山の松の梢（こずえ）を飛びまして、遠くも参りませんで、塀の上に、この、野の末の処へ入ります。真赤（まっか）な、まん円（まる）な、大きな太陽様（おひさま）の前に黒く留まったのが見えたのでございます。私は跣足（はだし）で庭へ駈下（かけお）りました。駈けつけて声を出しますと、烏はそのまま塀の外へまた飛びましたのでございます。ちょうどそこが、裏木戸の処でございます。あの木戸は、私が御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開け遊ばした事といっては一度もなかったのでございます。

紳士　うむ、あれは開けるべき木戸ではないのじゃ。
俺が覚えてからも、止（や）むを得ん凶事で二度だけは開けんければならんじゃった。が、それとても凶事を追出いたばかりじゃ。外から入って来た不祥（ふしょう）はなかった。——それがその時、汝（きさま）の手で開いたのか。

侍女　ええ、錠（じょう）の鍵（かぎ）は、がっちりささっておりましたけれど、赤錆（あかさび）に錆切りまして、圧（お）しますと開きました。くされて落ちたのでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立っていたのでございます。その男が、鳥の嘴（くちばし）から落しました奥様のその指環を、掌（てのひら）に載せまして、凝（じっ）と見ていましたのでございま

す。

紳士　餓鬼（がっき）め、其奴（そいつ）か。

侍女　ええ。

紳士　相手は其奴じゃな。

侍女　あの、私（わたくし）がわけを言って、その指環を返しますように申しますと、串戯（じょうだん）らしく、いや、これは、人間の手を放れたもの、鳥の嘴から受取ったのだから返されない。もっとも、鳥にならば、何時（なんどき）なりとも返して上げよう——とそう申して笑うんでございます。それでも、どうしても返しません。そして——確（たしか）に預る、決して迂散（うさん）なものでない——と云って、

ちゃんと、衣兜(かくし)から名刺を出してくれました。奥様は、面白いね――とおっしゃいました。それから日を極(き)めまして、同じ暮方の頃、その男を木戸の外まで呼びましたのでございます。その間に、この、あの、鳥の装束をお誂(あつら)え遊ばしました。そして私(わたくし)がそれを着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございましたが、なぶってやろう、とおっしゃって、奥様が御自分に鳥の装束をおめし遊ばして、塀の外へ――でも、ひょっと、野原に遊んでいる小児(こども)などが怪しい姿を見て、騒いで悪いというお心付きから、四阿(あずまや)へお呼び入れになりました。

紳士　奴は、あの木戸から入ったな。あの、木戸から。

侍女　男が吃驚（びっくり）するのを御覧、と私（わたくし）にお囁（ささや）きなさいました。奥様が、鳥は脚では受取らない、とおっしゃって、男が掌（てのひら）にのせました指環を、ここをお開きなさいまして、（咽喉（のど）のあく処を示す）口でおくわえ遊ばしたのでございます。

紳士　口でな、もうその時から。毒蛇め。上顎下顎（うわあごしたあご）へ拳（こぶし）を引掛（ひっか）け、透通る歯と紅（べに）さいた唇を、めりめりと引裂く、売女（ばいた）。（足を挙げて、枯草を踏躙（ふみにじ）る。）

画工　ううむ、（二声ばかり、夢に魘（うな）されたるもののごとし。）

紳士　（はじめて心付く）女郎(めろう)、こっちへ来い。（杖(ステッキ)をもって一方を指(ゆびさ)す。）

侍女　（震えながら）はい。

紳士　頭(かしら)を着けろ、被(かぶ)れ。俺の前を烏のように躍って行(ゆ)け、——飛べ。邸を横行する黒いものの形を確(しか)と見覚えておかねばならん。躍れ。衣兜(かくし)には短銃(ピストル)があるぞ。

侍女、烏のごとくその黒き袖を動かす。おののき震うと同じ状(さま)なり。紳士、あとに続いて入(い)る。

三羽の烏　（声を揃えて叫ぶ）おいらのせいじゃないぞ。

一の烏　（笑う）はははは、そこで何と言おう。

二の烏　しょう事はあるまい。やっぱり、あとは、烏のせいだと言わねばなるまい。

三の烏　すると、人間のした事を、俺たちが引被(ひっかぶ)るのだな。

二の烏　かぶろうとも、背負(しょ)おうとも。かぶった処で、背負った処で、人間のした事は、人間同士が勝手に夥間(なかま)うちで帳面づらを合せて行(ゆ)く、勘定の遣(や)り取りする。俺たちが構う事は少しもない。

三の烏　成程な、罪も報(むくい)も人間同士が背負いっこ、被(かぶ)りっこをするわけだ。一体、このたびの事の発源(おこり)は、

そこな、お一(いち)どのが悪戯(いたずら)からはじまった次第だが、さて、こうなれば高い処で見物で事が済む。嘴(くちばし)を引傾(ひっかた)げて、ことんことんと案じてみれば、われらは、これ、余り性(たち)の善(い)い夥間でないな。

一の烏　いや、悪い事は少しもない。人間から言わせれば、善いとも悪いとも言おうがままだ。俺はただ屋の棟で、例の夕飯(ゆうめし)を稼いでいたのだ。処で艶麗(あでやか)な、奥方とか、それ、人間界で言うものが、虹の目だ、虹の目だ、と云うものを（嘴(くちばし)を指す）この黒い、鼻の先へひけらかした。この節、肉どころか、血どころか、贅沢(ぜいたく)な目玉などはついに賞翫(しょうがん)した験(ためし)がな

い。鳳凰の髄、麒麟の鰓さえ、世にも稀な珍味と聞く。虹の目玉だ、やあ、八千年生延びろ、と逆落しの廂のはずれ、鶲越を遣ったがよ、生命がけの仕事と思え。鳶なら油揚も攫おうが、人間の手に持ったままを引手繰る段は、お互に得手でない。首尾よく、かちりと銜えてな、スポンと中庭を抜けたは可かったが、虹の目玉と云う件の代ものはどうだ、歯も立たぬ。や、堅いの候の。先祖以来、田螺を突つくに練えた口も、さて、がっくりと参ったわ。お庇で舌の根が弛んだ。癪だがよ、振放して素飛ばいたまでの事だ。な、それが源で、人間が何をしょ

うと、かをしょうと、さっぱり俺が知った事ではあるまい。

二の烏　道理かな、説法かな。お釈迦様より間違いのない事を云うわ。いや、またお一どのの指環を銜えたのが悪ければ、晴上がった雨も悪し、ほかほかとした陽気も悪し、虹も悪い、と云わねばならぬ。雨や陽気がよくないからとて、どうするものだ。得ての、空の美しい虹の立つ時は、地にも綺麗な花が咲くよ。芍薬か、牡丹か、菊か、猿が折って蓑にさす、お花畑のそれでなし不思議な花よ。名も知れぬ花よ。ざっと虹のような花よ。人間の家の中に、そうした

花の咲くのは壁にうどんげの開くとおなじだ。俺たちが見れば、薄暗い人間界に、眩(まぶし)い虹のような、その花のパッと咲いた処は鮮麗(あざやか)だ。な、家を忘れ、身を忘れ、生命(いのち)を忘れて咲く怪しい花ほど、美しい眺望(ながめ)はない。分けて今度の花は、お一どのが蒔(ま)いた紅(あか)い玉から咲いたもの、吉野紙の霞で包んで、露をかためた硝子(ビイドロ)の器(うつわ)の中へ密(そっ)と蔵(しま)ってもおこうものを。人間の黒い手は、これを見るが最後摑(つか)み散らす。当人は、黄色い手袋、白い腕飾と思うそうだ。お互に見れば真黒(まっくろ)よ。人間が見て、俺たちを黒いと云うと同一(おなじ)かい、別して今来た親仁(おやじ)などは、鉄棒同然、

腕に、火の舌を搦(から)めて吹いて、右の不思議な花を微塵(みじん)にしょうと苛(あせ)っておるわ。野暮(やぼ)めがな。はて、見ていれば綺麗なものを、仇花(あだばな)なりとも美しく咲かしておけば可(い)い事よ。

三の烏　なぞとな、お二(ふた)めが、体(てい)の可(い)い事を吐(ぬか)す癖に、朝烏の、朝桜、朝露の、朝風で、朝飯を急ぐ和郎(わろ)だ。何だ、仇花なりとも、美しく咲かしておけば可い事だ。からからからからと笑わせるな。お互にここに何している。その虹の散るのを待って、やがて食おう、突こう、嘗(な)みよう、しゃぶろうと、毎夜、毎夜、この間、……咽喉(のど)、嘴(くちばし)を、カチカチと噛鳴(かみな)らいてお

るのでないかい。

二の烏　さればこそ待っている。桜の枝を踏めばといって、虫の数ほど花片（はなびら）も露もこぼさぬ俺たちだ。このたびの不思議なその大輪の虹の台（うてな）、紅玉の蕊（しべ）に咲いた花にも、俺たちが、何と、手を着けるか。雛芥子（ひなげし）が散って実になるまで、風が誘うを視（なが）めているのだ。色には、恋には、情（なさけ）には、その咲く花の二人を除（の）けて、他の人間はたいがい風だ。中にも、ぬしというものはな、主人（あるじ）というものはな、淵（ふち）に棲（す）むぬし、峰にすむ主人（あるじ）と同じで、これが暴風雨（あらし）よ、旋風（つむじかぜ）だ。一溜（ひとたま）りもなく吹散らす。ああ、無慙（むざん）な。

一の鳥　と云ふ嘴(くちばし)を、こつこつ鳴らいて、内々その吹き散るのを待つのは誰だ。

二の鳥　はははは、俺達だ、はははは。まず口だけは体(てい)の可(い)い事を言うて、その実はお互に餌食(えじき)を待つのだ。また、この花は、紅玉の蕊(しべ)から虹に咲いたものだが、散る時は、肉になり、血になり、五色(ごしき)の腸(はらわた)となる。やがて見ろ、脂の乗った鮟鱇(あんこう)のひも、という珍味を、つるりだ。

三の鳥　いつの事だ、ああ、聞いただけでも堪(たま)らぬわ。

(ばたばたと羽を煽(あお)つ。)

二の鳥　急ぐな、どっち道俺たちのものだ。餌食がそ

の柔かな白々とした手足を解いて、木の根の塗膳（ぬりぜん）、錦手（にしきで）の木（こ）の葉の小皿盛となるまでは、精々、咲いた花の首尾を守護して、夢中に躍跳ねるまで、楽（たのし）ませておかねばならん。網で捕（と）ったと、釣ったとでは、鯛（たい）の味が違うと言わぬか。あれ等を苦（くるし）ませてはならぬ、悲（かなし）ませてはならぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の烏　むむ、そこで、椅子（いす）やら、卓子（テエブル）やら、天幕（テント）の上げさげまで手伝うかい。

三の烏　あれほどのものを、（天幕を指す）持運びから、始末まで、俺たちが、この黒い翼で人間の目から蔽（おお）

うて手伝うとは悟り得ず、薄（すすき）の中に隠したつもりの、彼奴等（あいつら）の甘さが堪（たま）らん。が、俺たちの為（な）す処は、退いて見ると、如法（にょほう）これ下女下男の所為（しょい）だ。天（あめ）が下に何と烏ともあろうものが、大分権式を落すわけだな。

二の烏　獅子（しし）、虎（とら）、豹（ひょう）、地を走る獣。空を飛ぶ仲間では、鷲（わし）、鷹（たか）、みさごぐらいなものか、餌食を攫んで容色（きりょう）の可（い）いのは。……熊なんぞが、あの形で、椎の実を拝んだ形な。鶴とは申せど、尻を振って泥鰌（どじょう）を追懸（おっかけ）る容体などは、余り喝采（やんや）とは参らぬ図だ。誰も誰も、食（くら）うためには、品も威も下げると思え。さまでにして、手に入れる餌食だ。突（つつ）くとなれば会釈は

ない。骨までしゃぶるわ。餌食の無慙（むざん）さ、いや、またその骨の肉汁（ソップ）の旨（うま）さはよ。（身震いする。）

一の烏　（聞く半ばより、じろじろと酔臥（よいふ）したる画工を見ており）おふた、お二どの。

二の烏　あい。

三の烏　あい、と吐（ぬか）す、魔ものめが、ふてぶてしい。

二の烏　望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。

一の烏　いや、串戯（じょうだん）は措（お）け。俺は先刻（さっき）から思う事だ、待設けの珍味も可（い）いが、ここに目の前に転がった餌食はどうだ。

三の烏　その事よ、血の酒に酔う前に、腹へ底を入れ

てお く相談にはなるまいかな。何分にも空腹だ。

二の烏　御同然に夜食前よ。俺も一先に心付いてはいるが、その人間はまだ食頃にはならぬと思う。念のために、面を見ろ。

三羽の烏、ばさばさと寄り、頭を、手を、足を、ふんふんとかぐ。

一の烏　堪らぬ香だ。

三の烏　ああ、旨そうな。

二の烏　いや、まだそうはなるまいか。この歯をくいしばった処を見い。総じて寝ていても口を結んだ奴は、蓋をした貝だと思え。うかつに嘴を入れると最

後、大事な舌を挟まれる。やがて意地汚（いじきたな）の野良犬が来て舐（な）めよう。這奴（しゃっ）四足（よつあし）めに瀬踏（せぶみ）をさせて、可（よ）いとなって、その後で取蒐（とりかか）ろう。食ものが、悪いかして。脂のない人間だ。

一の烏　この際、乾（ひ）ものでも構わぬよ。

二の烏　生命（いのち）がけで乾ものを食って、一分（いちぶん）が立つと思うか、高蒔絵（たかまきえ）のお肴（とと）を待て。

三の烏　や、待つといえば、例の通り、ほんのりと薫って来た。

一の烏　おお、人臭いぞ。そりゃ、女のにおいだ。

二の烏　はて、下司（げす）な奴、同じ事を不思議な花が薫る

と言え。

三の烏　おお、蘭奢待（らんじゃたい）、蘭奢待。

一の烏　鈴ケ森でも、この薫（かおり）は、百年目に二三度だったな。

二の烏　化鳥（ばけどり）が、古い事を云う。

三の烏　なぞと少（わか）い気でおると見える、ははは。

一の烏　いや、こうして暗やみで笑った処は、我ながら無気味だな。

三の烏　人が聞いたら何と言おう。

二の烏　烏鳴（からすなき）だ、と吐（ぬか）すやつよ。

一の烏　何も知らずか。

三の烏　不便(ふびん)な奴等。

二の烏　（手を取合うて）おお、見える、見える。それ侍女(こしもと)の気で迎えてやれ。（みずから天幕(テント)の中より、燭(とも)したる蠟燭(ろうそく)を取出だし、野中に黒く立ちて、高く手に翳(かざ)す。一の烏、三の烏は、二の烏の裾(すそ)に踞(しゃが)む。）

薄(すすき)の彼方(あなた)、舞台深く、天幕の奥斜めに、男女(なんにょ)の姿立顕(たちあらわ)る。一(いっ)は少(わかき)紳士、一は貴夫人、容姿美しく輝くばかり。

二の烏　恋も風、無常も風、情(なさけ)も露、生命(いのち)も露、別るるも薄(すすき)、招くも薄、泣くも虫、歌うも虫、跡は野原だ、勝手になれ。（怪しき声にて呪(じゅ)す。一と三の烏、

同時に跪いて天を拝す。風一陣、灯消ゆ。舞台一時暗黒。）

はじめ、月なし、この時薄月出づ。舞台明くなりて、貴夫人も少紳士も、三羽の鳥も皆見えず。天幕あるのみ。

画工、猛然として覚む。

魘われたるごとく四辺を眗わし、慌しく画の包をひらく、衣兜のマッチを探り、枯草に火を点ず。

野火、炎々。絹地に三羽の鳥あらわる。

凝視。

彼処に敵あるがごとく、腕を挙げて睥睨す。

画工　俺の画を見ろ。――待て、しかし、絵か、それとも実際の奴等か。

――幕――

大正二（一九一三）年七月

底本：「泉鏡花集成７」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年12月４日第１刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十六巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年10月15日第１刷発行
入力：門田裕志
校正：今井忠夫
２００３年８月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。